



ブルーダルは神奈フィルの応援マスコットです。

2012年7月3日発行
発行・企画編集=神奈川フィルハーモニー管弦楽団事務局
発行人・編集人=大石修治
231-0004 横浜市中区元浜町2-13東照ビル3階
電話 045-226-5045

Prelude

Published by KANAGAWA PHILHARMONIC ORCHESTRA © 2012

2012
7/3 火

対談

「がんばれ!神奈フィル 応援団」副団長
川本守彦
川本工業株式会社 取締役社長

神奈川フィルハーモニー管弦楽団 専務理事
大石修治

大石(以下○)——本業でお忙しいにもかかわらず、いつも応援していただきありがとうございます。川本社長は私以上に神奈川フィルとの歴史を刻まれていると思いますが、出会いはいつ頃になりますか?

川本(以下K)——理事をお引き受けしたのは、平成10年です。それ以前、父の代から応援させていただいています。父は文化芸術に造詣が深く、團 伊玖磨氏(1996—2001神奈川フィル芸術顧問)とも親交がありました。実は私は音楽とは縁遠かったのです。小学校の頃は縦笛が苦手ですね。学生時代はアメリカンフットボールをやっていました。ところが理事になったご縁で、平成14年くらいから、民間の経営者の立場で神奈川フィルの経営状態を見るようになりました。当時はバランスシートを見て驚きましたね。これは何とかしなければいけないと思いました。あの頃と今がまったく違うのは、楽団員の意識です。当時は、全ての方ではないとしても、楽団員に「自分の楽団」という認識がなかった。今はそこがまったく違います。今の状況でも、楽団員のみなさんは本当に音楽が好きで、神奈川フィルを愛しているということが伝わってきます。演奏を聴くと体の芯に響きます。だから、みんなが支えたいと思うんです。

○——おっしゃる通り、楽団員の意識は本当に変わりました。新しい方向に向かっていきたいと、みんなが思っています。それとともに、楽団の組織の構造も変えつつあります。仕事のやり方や、単年度で確実に黒字にするという基盤が整ってきています。これからは補助金に頼る割合をできるだけ少なくし、自分たちの力でやっていけるようにならなければと思っています。

K——大切なことですね。このブルーダル基金で、神奈川フィルが新財団としてスタートすることがまず第一ですが、それで終わりではありません。本当のスタートです。自助努力をどれだけ続けられるか、真価が問われます。支えてくれる人のためにも、がんばらなくてはなりません。



この試練は、これからの
神奈川フィルの財産。
前向きに乗り越えたい。



○——地方のオーケストラは、事業全体の半分ほどを補助金に頼っています。神奈川フィルも同じくらいの割合だったのですが、最近6割近くが自分たちの収入でできるようになってきました。

K——それも楽団員のモチベーションの変化が大きいですね。意識が変わったことで、周囲の評価も上がってきました。全国のオーケストラの評価でもベスト10に入ってきています。この逆風の中でここまで上がってきたというのは、本物ですよ。これからますます伸びていくでしょう。それからメディアに露出する機会も増えましたね。これも大変重要なことです。

○——地域密着のネットワーク戦略をはじめ営業や広報広告部門を強化し、マーケティング戦略を進めています。

K——将来を考えれば、経営基盤の整備など今よりも貴重な経験をされていると思います。経済環境が変わる状況の中で、常に成長をめざして真摯に楽団のあり方を考えることが大切であり、基金活動をはじめ、大変ですけれども試練だと思います。

7月17日のコンサートは、来年への大きな一歩。ファンを広げるまたとないチャンス。

○——副団長としていろいろな場面でご支援いただいておりますが、7月17日のブルーダル基金コンサートも、川本社長が先頭に立って集客をしてくださっています。

K——とにかく個人の支援を明確に示す、大きな演奏会ですから。これは成功させなければいけません。来年の財団移行リミットまで時間があるようで、ないですからね。菅井円加さんが出てくださる今回のコンサートが成功すれば、より一層、ファンの裾野が広がると思います。

○——このコンサートはチケット代の4分の3を基金にお願いするという内容ですから、個人寄付が増えるということです。本当にありがとうございます。来年の7月のリミットまであと2つの大きな基金コンサートを企画しています。ひとつが来年1月8日のパシフィコでのコンサート。客席4500席で100名以上のオーケストラを予定しています。もうひとつが来年の7月、県民ホールでのポップスコンサート。これは県知事が音頭をとってプロデュースをされます。

K——7月17日のコンサートが終わったら、すぐ来年の準備にとりかからなければなりませんね。1月8日の段階で、債務超過を解消できるめどをつけなければなりません。それにしても、県知事や横浜市長は、本気で応援してくださっていてありがたいですね。オーケストラの大切さをわかっていらっしゃるのだと思います。募金集めをするときの大きな声! あれには熱意を感じます。県内の他の市長さんたち、町長さんたちからも、様々な応援のお話が寄せられるようになりました。

○——おかげさまで、6月29日現在で8,800万円ほどになりました。みなさんに支えられて、ここまで来ることができました。

感謝の気持ちは、演奏にもあらわれる。それが新たな感動を生みだしていく。

K——昨年は3月11日に震災がおき、日本中が悲しみに包まれました。天はいろいろな試練を与えるものです。神奈川フィルは被災地や仙台フィルも応援しましたね。音楽は理屈じゃない。人々を癒す力があると、つくづく感じました。いざというとき、苦しいとき、音楽が助けてくれる。

○——絶望の中でも、音楽を聞いて涙を流し、また前を向いて歩き出せるように生きる力を与えていく。それが音楽の力です。

K——まだまだ社会全体の経済環境もよくない状況です。リーマンショック以降、歴史的な円高、欧州債務不安、米国経済の不透明さ...でもこれだけの悪条件下で、神奈川フィルが個人にも企業にも理解を得られているというのは、素晴らしいことです。企業にとって大変なとき、文化芸術が一番遠い存在になってしまいがちですから。また神奈川フィルは今までもいろいろな役割を果たしてきています。子供への情操教育などの社会貢献、神奈川のさまざまな市町村への出張コンサートなど...。楽団員のみなさんは感謝の気持ちと、責任感を持って出かけていらっしゃる。そういう気持ちは音にも反映されますから、ますます評価が上がるでしょう。

○——コンサートにもいらしていただいておりますが、いかがですか?

K——前の号で林市長もおっしゃっていますが、演奏を聴くと気持ちが和みます。「百聞は一見にしかず」と言いますが、神奈川フィルの場合「百聞は一聴にしかず」ですね。とにかく聴いたことのない人は、一度聴きにきてもらいたい。終わったあと、みなさんニコニコしています。ロビーに出てファンと触れ合っている楽団員の方も、いい顔をしています。募金箱に、小さいお子さんが自分のお小遣いを募金してくださる、そんな光景には本当に感動します。コンサートのチケット代金以上を入れてくださる方もいます。金額以上に、みなさんの「想い」は「重い」ですね。

○——すべてが神奈川フィルにとっての財産です。恩返しができるようにしなければと思っています。

K——日に日に、支援の輪が広がっています。まずはブルーダル基金、達成させましょう。大変な試練だけれど、これは神奈川フィルの財産になる。前向きに乗り越えないとね。